

# ”The Importance of Being Earnest”

## ——表層と実体の問題について

横野健二

### I. Ernest and earnest

この作品は、Ernest と earnest の語呂合わせの題名に要約されていると言えよう。Jack と Algernon の Ernest になろうとする earnest な努力を喜劇として描く中で Wilde は、真に earnest であることとはどういうことであるかを、我々に逆説的に提示している。そしてそこを通して、名前に象徴されるものと真の人間の姿との関係についての考察を示しているのである。この小論では、上記の視点に立って、earnest と Ernest の二つをキー・ワードとしてこの作品を分析してみようと思う。

### II. Who is 'Ernest'?

Ernest とは何者か。基本的には Jack が作り出した架空の弟である。彼は Cecily という少女の後見人であるため、田舎では極めて道徳的な生活を送らざるを得ないのだが、彼にはそれが嫌でたまらない。そのことは Jack 自身の言葉 '... a high moral tone can hardly be said to conduce very much to either one's health or one's happiness,...' (FIRST ACT, p.259, 1.1-2) に表されているし、田舎での彼の様子を述べる Cecily の以下の二つの台詞からも明らかである。

CECILY: Dear Uncle Jack is so serious! Sometimes he is so serious that I think he cannot be quite well. (SECOND ACT, p.274, 1.21-22)

MISS PRISM: I know no one who has a higher sense of duty and responsibility.

CECILY: I suppose that is why he often looks a little bored when we three are together. (SECOND ACT, p.274, 1.25-28)

そのため彼は Ernest という架空の弟を作り出し、その弟の不始末を口実にして田舎を離れロンドンへ行くのである。この点からのみ見れば Ernest は、Algernon が社交上の義務を回避し、田舎に遊びに行く時に口実として使う Bunbury と同じく全く架空の人物に過ぎない。そして、Algernon の 'perfectly invaluable' (FIRST ACT, p.259, 1.2) という言葉に見られるよう、極めて便利な人物である。必要ならば、この世から抹消することさえ出来るのだ。事実 Jack は FIRST ACT, p.260, 1.5-6 で 'If Gwendolen accepts me, I'm going to kill my brother,...' と言っているし、Algernon でさえ、THIRD ACT, p.303, 1.2 で 'In fact, Bunbury is dead,' とあっさり殺してしまっている。

ところが Jack が、ロンドンへ行くと自らが Ernest と名乗っており、その名前のままで Gwendolen と婚約してしまうあたりから問題は複雑になっていく。架空の人物が実体を持つのである。一方 Jack から Cecily のことを聞いた Algernon の方も、Ernest になりすまして彼の田舎に行き、Cecily と婚約してしまう。このことは事態を更に複雑化していく。Ernest は純粹に架空の人物、Jack の存在しない弟であるにもかかわらず、Jack 自身でもあり、同時に Algernon でもあるという、つまり架空の人物であると同時に実在の、それも二人の人物で

あるという、極めて逆説的な存在となってしまっているのである。それはまた、Ernest を名乗る彼らと婚約した Gwendolen と Cecily から見れば、共に実在の人物と婚約をしていながら 'neither of us is engaged to be married to anyone.' (SECOND ACT, p.296, l.13-14) という、これまた逆説的な事態を引き起こしてしまっている。つまり、この戯曲が基本的に提起している問題は名前と実体との乖離であり、その間の矛盾なのである。

ただし、いかにも Wilde 的だと言えるのは、単に実在の人間が架空の人物になりすましているのではなく、Ernest という架空の人物がまず前提として存在し、その名を騙っていた実在の人物が、その架空の人物そのものにならなければならないという、逆説的な構造である。Gwendolen が婚約したのは Jack という実在の人物であるが、彼女は Ernest という名前ゆえに彼を愛している。いや Ernest という名前に対する憧れが元々あり、偶然その名を騙った Jack を愛したに過ぎないことが以下の台詞からは窺える。

GWENDOLEN: ... my ideal has always been to love someone of the name of Ernest. There is something in that name that inspires absolute confidence. The moment Algernon first mentioned to me that he had a friend called Ernest, I knew I was destined to love you. (FIRST ACT, p.263, l.32-35)

同様に Cecily も、Ernest という名前に対する憧れから Jack の架空の弟を愛し、それゆえにその名を名乗る Algernon と婚約したことは以下の台詞より明らかである。

CECILY: Well, ever since dear Uncle Jack first confessed to us he had a younger brother who was every wicked and bad, you of course have formed the chief topic of conversation between myself and Miss Prism. ... but I fell in love with you, Ernest. (SECOND ACT, p.287, l.6-12)

CECILY: ... it had always been a girlish dream of mine to love some one whose name was Ernest. (SECOND ACT, p.288, l.21-22)

つまり、名前という表層的な事象から開放され真実の自分に戻ることによってではなく、自らが騙った偽名に自らを一致させることによってしか問題が解決されないところにこの戯曲の逆説性がある。Jack も Algernon も、Ernest という名前を語ることによって婚約者の愛を得ているのだが、それが偽名であることが発覚した途端にその婚約はないも同然のものとなるのは、前に引用した Gwendolen の台詞の通りである。そして彼らが洗礼を受けて Ernest という名前になると告げることによってのみ和解が成り立つのである。ここでは名前と実体との関係が完全に逆転していて、名前の方が実体にたいして常に優位に立っているのである。

もう一つ興味深い点は、架空の人物の Ernest の方は、Jack の口から語られる時は 'gets into the most dreadful scrapes', 'profligate', 'wicked and bad' と、極めて否定的に描かれているのとは対照的に、Ernest を語る偽物の方が earnest に相応しいイメージを与えられていることである。Jack は Algernon から見れば 'You are the most earnest-looking person I ever saw in my life.' (FIRST ACT, p.257, l.32-33) であるし、Algernon でさえ、Cecily にとっては 'my poor, innocent, trusting boy' なのである。加えて、先に引用した、田舎での Jack の様子を述べる Cecily の台詞から考えれば、本名を使っているときの Jack

はどこかきこちなく、自らを偽っている感がある。それに対して、ロンドンで Ernest を名乗っている時の Jack の方は、先の Algernon の台詞や、Gwendole が 'It(=Ernest) suits you perfectly.' (FIRST ACT, p.257, l.14) と言っているように、こちらの方が真の彼の姿ではないかと思わせる部分がある。実はこれがこの作品の結末の伏線になっているのだが、偽名を騙っている時の自分こそが真の自分であり、本名を名乗る時には自らを偽らなければならないという状態に Jack は置かれているのである。

### III. What is meant by being earnest?

では earnest であるとは、どのような状態を意味するのであろうか。いもしない弟を口実に田舎を抜け出しロンドンで遊び歩いている Jack は、Miss Prism が考えているほど立派な人間ではなさそうである。ましてや親類・知人を得意の逆説で嘲笑し、架空の友人 Bunbury を口実に社交の義務から抜け出し、あまつさえ友人とその恋人との内緒話を立ち聞きした上、Jack の架空の弟になりすまして Cecily に会いに行く Algernon などは、紳士の風上にもおけないと言うべきではないのか。一体彼らのどこに earnest と呼びうる要素があると言うのだろうか。

その前に、逆に当時どのような人物が理想とされていたのかを、この劇での敵役とも言うべき Lady Blacknell の台詞より考察してみよう。FIRST ACT における Jack とのやり取りの中で、彼女が彼に対して興味をそそられていることを示す台詞は以下の2箇所であろうと思われる。

Lady Blacknell: ... What is your income?

Jack: Between seven and eight thousand a year.

Lady Blacknell: [makes a note in her book] In land, or in investments?

(p.266, l.28-32, emphasis added)

Jack: I have a country house with some land, of course, attached to it, about fifteen hundred acres, I believe; ...

Lady Blacknell: A country house! How many bedrooms? Well, that point can be cleared up afterwards.... (FIRST Act, p.267, l.3-8)

そして Jack は駅に捨てられた子供であったこと、そしてそのため両親がどんな人間なのかも分からないということが明らかになった途端に、'You can hardly imagine that I and Lord Blacknell would dream of allowing our only daughter -- a girl brought up with the utmost care -- to marry into a cloak-room, and form an alliance with a parcel.' (p.269, l.3-6) と言い残して Lady Blacknell は去っていき、婚約の話は一気にご破算になってしまうのである。

Bolton 侯爵婦人と同じリストを持っているという彼女の台詞から考えて、Lady Blacknell だけが特別に変わった人間観を持っているということではなさそうである。とすれば、当時の望ましい人間というのは結局、良い家柄の出で、収入も多く、資産の持ち主ということになる。Cecily に関するやり取りの中で、彼女の資産のことを耳にした途端に、それまで興味を示さなかった Algernon と Cecily の結婚に、Lady Blacknell が手のひらを返したように賛成していることも、この価値観を裏付けるものと言えるだろう。しかし、家柄、収入、そして資産

とは一体何を表すものなのだろうか。固定的な階級制度に基づく当時のイギリスにおいては、良き家柄とは、究極的には貴族に生まれることを意味するに過ぎない。そしてそれは、その人物がどのような人間であるかとは基本的に無関係のことである。資産はどうか。自ら貯め込む場合もあろうが、これも基本的には親から譲り受けるものの方が大きいであろう。Jack にしても、その膨大な資産は自らの努力で得たものではなく、ヴィクトリア駅で彼を見つけ、彼を養子にした Old Mr Thomas Cardew より受け継いだものである筈である。ならば収入はどうか。ここには個人の努力の余地が多少ありそうである。しかし職業選択の自由もが制限されている階級社会において、下層階級の者が幾ら努力を重ねたとしても、所詮たかが知れているというものではないのだろうか。自らが親より受け継いだ資産を運用した方がはるかに高収入が得られるのではないのか。その証拠に、何ら職業に就いているとは思えない Jack は、おそらく Old Mr Cardew より譲り渡されたと思われる土地や資産を運用することで、年に7000ポンドから8000ポンドという（恐らく当時としては極めて高額の）収入を得ているのではないか。'I happen to be more than usually hard up.' (FIRST ACT, p.256, l.22-23) という Algernon でさえ、特に仕事に就いているわけでもなく、気の赴くままに Bunburying など称して遊び回っているだけではないか。結局のところ家柄も収入も資産も、自らが生まれた時に、運が良ければ付随的に手にすることができるものであり、それは名前同様に、表層的な事柄に過ぎない。その個人の持つ人間性や内面的な価値とは全く無関係なものなのである。上流階級の間違った持つ価値観とは所詮この程度のものだとして Wilde は言っているのである。そして earnest であるということは、この様な価値観とは何の関係も無いのだと。

再び Jack と Algernon に話を戻そう。彼らのどこが earnest であると Wilde は言いたいのであろうか。THIRD ACT には次のような台詞のやり取りが書かれている。

Cecily: ... Mr Monclief, kindly answer the following question. Why did you pretend to be my guardian's brother?

Algernon: In order that I might have an opportunity of meeting you.

(p.300, l.24-28)

Gwendolen: ... Mr Worthing, what explanation can you offer to me for pretending to have a brother? Was it in order that you might have an opportunity of coming up to town to see me as often as possible?

Jack: Can you doubt it, Miss Fairfax? (p.301, l.8-12)

Gwendolen and Cecily [speaking together]: Your Christian names are still an insuperable barrier. That is all.

Jack and Algernon [speaking together]: Our Christian names! Is that all? But we are going to be christened this afternoon. (p.301, l.28-31)

洗礼というものがその当時どれだけ宗教的な重みをまだ持っていたかは別として、少なくとも Jack と Algernon の言葉を信ずるかぎりでは、彼らは愛する女性の愛を勝ち取るという面では earnest であると言えよう。Gwendolen に会うために、架空の弟を口実にして後見人としての義務を放棄し、頻りにロンドンに出てきたあげく、Ernest という名前でなければ愛せないという彼女の言葉に、洗礼を受けようという Jack。その架空の弟になりすまして Cecily

に接近し、一旦恋に落ちるや、彼女の愛を勝ち取るためなら、自ら 'perfectly invaluable' とまで言った Bunbury をあっさり死なせ、同じく Ernest という名前欲しさに洗礼を受けようという Algernon。彼らにとって、自分がどういう名前の持ち主であるか、言い換えれば、表層的な意味合いにおいて自分がどういう人物であるかということには、何の執着もない。彼らは Ernest という名前ゆえに、自ら愛する女性の愛を勝ち取った。その名前でなければ愛を繋ぎ止められないというのであれば、洗礼でも何でもして、その名前を自ら名乗れるようにすればよいというだけのことなのである。彼らにとって武器となりうるのは、家柄でも、収入でも、資産でもない。唯一 Ernest という名前だけなのだ。名前を変えたからと言って自分自身が変わるわけではない。Jack であろうと、Algernon であろうと、まして Ernest であろうと、自分は自分であり、名前など愛する女性の愛と比べる程の価値も持ってはいないのだ。自らの最も内面的な部分である、愛の成就への欲求、それのみが彼らにとっては真実なのである。滑稽な、しかも当時の価値観をあざ笑うような形ではあるけれども、彼らにとって earnest であるとは、こういうことなのだ。そして興味深いことには、Gwendolen も Cecily も、その点において彼らと同じ価値観を有していると言えよう。彼女らにとっては Ernest という名前に対する憧れがあった。その名を名乗る人物を愛し、その人物から愛されていれば、それで充分なのである。もちろん彼女らが愛しているのは、Jack であり Algernon であり、彼らの家柄や、収入や、資産なのではなく、彼ら自身なのであるが、それは結局、彼女らの内なる愛の欲求を充たしたのが彼らだからである。そして名前の問題さえ、洗礼を受けるという彼らのなりふり構わぬ努力の前に、ついには二次的なものとなっていくのである。

ここには、はっきりとした価値観の対比がある。Lady Blacknell の代表する表層的・物質的価値観に対して、Jack と Algernon の方は、自らの愛の成就という、より人間的・内面的な価値観に従って行動している。これこそが Wilde にとって earnest であるということなのである。表層的な価値ではなく、人間にとって内的で、それゆえに本質的な価値を追求することこそが重要なのだ。

#### IV. "The Importance of Being Earnest" vs. "Romeo And Juliet"

名前とその実体との相克という観点で考えれば、この戯曲はまた Shakespeare の "Romeo And Juliet" のパロディーとも考えられる。お互いに対立し合う Montague 家と Capulet 家に生まれた Romeo と Juliet の悲劇は、名前というものに押し潰された悲恋の物語であるが、同じ問題を取り上げながらも、Wilde はそれを全く逆の形で展開しているのである。明らかに Shakespeare にとっても名前など表層的なものであり実体こそが重要であったことは、以下の台詞から明らかである。

Juliet: O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo?  
Deny thy father and refuse thy name; ... (Act 2, Scene 2, l.33-34)

Juliet: Thou art thyself, though not a Montague. (Act 2, Scene 2, l.39)

Romeo: In what vile part of this anatomy / Doth my name lodge? ...  
(Act 3, Scene 3, l.106-107)

Romeo にとっても Juliet にとっても、重要であるのは名前ではなく、偶然その名を付けられ

ている実体としての人物なのである。それゆえ、彼らは自らの名を、つまりは家を捨てることによって愛を成就しようとしたのである。それゆえ、彼らの取った方法は、偽装としての死であった。Juliet を死んだと見せかけることで、Juliet はその名を捨てて、実体のみ人間となり、一方 Romeo は家を捨てることで、名前の呪縛から逃れようとしたのである。しかし、偽装としての死は、結果的には真の死に繋がってしまった。彼らは共に死に、その死を代償とした、Montague 家と Capulet 家の和解が結末において暗示されてこの戯曲は終わる。

Shakespeare が示した解答とは結局何であったのか。それは、人間は決して名前から開放されることはなく、純粋な愛さえもその呪縛を解きほぐせないというものではなかったか。名前は常に実体を支配するものであり、名を否定するということは、実体その物の否定に他ならないということではないのか。Romeo と Juliet の悲劇は、最終的には両家の対立の犠牲となった悲劇的な恋人達という形で収束した。彼らは自らの名前に押し潰されたのであり、名前が実体に対して常に優位に立っているのである。

Wilde はこれを逆転させた。II. で述べたように、Gwendolen にとっても Cecily にとっても、Ernest という名前こそが重要であり、その名前でなければ相手を愛せないというのだ。そして Jack と Algernon にとっては、自分の名前を捨てることによってしか彼女達の愛を引きとめることができないのである。Ernest という名前こそが重要なのだ。

基本的に同じモチーフを用いながら、この点において Wilde は "Romeo And Juliet" とは逆の展開をこの戯曲に辿らせていく。彼はもちろん、自分の登場人物を死に至らせることなど考えてはいない。それどころか、誕生、つまり生を象徴する洗礼によって問題を解決しようと思わせる。所詮 Ernest という名前が重要であるなら、その名前を手に入れば済むことなのだ。そして Jack と Algernon の置かれた状況は、真に名前の優越を示すもののように思われ、またそれ以外には解決策はなさそうである。しかし Wilde の真意はそれをさらに逆転させることにあった。では彼の解答は、一体どんなものであろうか。

## V. The Importance of Being Earnest

問題の設定、展開が逆説的であった分、その解答はさらに荒唐無稽なものになった。Ernest という名前を得るために洗礼を受ける、という Jack と Algernon の言葉に、Gwendolen も Cecily も彼らの思いの深さを知り、一旦名前の問題は解決したかに見える。そして、事実ここで戯曲を終わらせることもできたのかも知れない。名前など所詮、形式的な儀式を経るだけで幾らでも変わり得るものでしかなく、人間の実体とは無関係のものなのだと暗示することで。しかし、それは解決には程遠いものであろう。名前の優位を逆説的な形で批判しながらも、結局はその優位性を確認したに過ぎないのである。それゆえ Wilde はそうはしなかった。

ハッピー・エンドに終わると思われたこの場面にもう一波乱起きる。親に黙って家を出て来た Gwendolen を追いかけてきた、Lady Blacknell が登場し相変らず結婚に反対の意を示すのである。Algernon と Cecily の結婚に関しては、当初反対の意志を表明するのだが、Cecily の莫大な資産を聞くに及んで手のひらを翻して賛成する。ところがこちらは、Cecily の後見人の立場を利用しようとする Jack が、彼らに結婚の許可を与えることを、Gwendolen との結婚を認めさせることの交換条件にしたために、これまた雲行きが怪しくなる。恋人同士が、名前の問題を克服しつつある時に、名前の裏にあり、名前によって代表される表層的な価値観が再び彼らの前に立ちはだかってくるのである。しかし、そこへ Miss Prism が登場する。そして、Lady Blacknell の糾弾の後に、彼女こそが Jack を駅に置きざりにした張本人であり、実は Jack は Lady Blacknell の甥であり、Algernon の兄であり、他ならぬ Ernest という

名前であることが判明する。かくして Jack(Ernest) は Gwendolen と、Algernon は Cecily と無事結ばれて、おまけに Miss Prism までも Dr. Chasubul と結ばれ大団円となる。

'... all his life he has been telling nothing but the truth.' (THIRD ACT, p.313, 1.12) という Jack の台詞にあるように、彼が Gwendolen に言ってきたことは結局すべて真実であった。彼は事実 Ernest であったし、名前こそ違おうが、厄介者の弟もいた。Algernon の方も Jack の弟であるという点では Cecily に嘘をついている訳ではなかった。そしてこの段階で問題はすべて解決しているのである。Jack は Gwendolen の考える恋人の条件を充たしていることはもちろん、彼女との結婚の障害となっていた自分の家柄の問題にも決着を付けている。自分と同じ家柄の出であるというのなら Lady Blacknell も反対はしないであろう。Algernon も、Jack の弟と結ばれたいという Cecily の願いを無事叶えることになる。

これが Wilde の答えなのだ。名前の違い、家柄の問題など、所詮この程度の重要性しか持たないのだと Wilde は言いたいのである。Lady Blacknell があれほどこだわった価値など、所詮は実体としての人間に付着している付随的な物に過ぎず、重要なことは、そのような表層的な価値にこだわるのではなく、Jack や Algernon のように、自らに対して如何に真摯であるかということなのだ。そしてその思いに真摯であれば、その他の問題など自然に解決されるものなのである。もちろんこれは、余りにも楽観的であるし、出来過ぎた話ではある。しかし Wilde は、"Romeo and Juliet" に代表される、名前や家柄によって押し潰される人間達の悲劇を逆転させることで、真に重要なものはどちらであることを示そうとしているのである。

この戯曲の結びの台詞は Jack の '... , I've realized for the first time in my life the vital Importance of Being Earnest.' (THIRD ACT, p.313, 1.22-23) である。金とか家柄などの世俗的な価値に捕われた Lady Blacknell から見れば、恋人達が問題を乗り越えて結ばれることなど、所詮 'triviality' なのかもしれない。しかし Wilde から見れば Lady Blacknell の代表する価値こそ表層的で trivial な事柄に過ぎないのである。earnest であるとは、人間が如何に自己に忠実に生きていくかの問題であり、そこにこそ真の価値があるというのが Wilde の解答なのだ。重要なのは表層としての姿ではなく、実体としての自分自身なのだ。

## VI. 結びに

以上、表層と実体の乖離という観点からこの戯曲を読み直してみた。Wilde 自身、この主題にかなり問題意識を持っているようで、'The Happy Prince' 及び 'The Picture of Dorian Gray' といった作品で同じモチーフを繰り返し用いている。そして彼の出す解答も常に同じである。幸福のイメージで作られた像の王子は実は不幸であり、その表層的なイメージを捨てたときに初めて王子は幸福になれたし、自らの実体を良心と共に絵に預け、自らは若さと美しさという表層のみとして存在しようとした Dorian が、自らの実体を消滅させて、その試みを完遂しようとした時に彼を待っていたのは自分自身の死であった。表層と実体を故意に、そして極端に乖離させながら、結局 Wilde の主張しようとしたことは、当時の社会において、そして恐らく現代においても、重きを置かれがちな金や地位や家柄、ひいては見栄えや服装などと言った表層よりも、実体として人間自身が常に優位に立たなければならないということではないのだろうか。

Text: Plays, Oscar Wilde, Penguin Books, 1978